

「オンライン本格導入が新聞記者のスポーツ取材に与える影響について—東京五輪・パラリンピック取材を対象とした検証」

スポーツクラブマネジメントコース

5014A321-4 田中充

研究指導教員 間野 義之教授

I 背景

深刻な呼吸器疾患を引き起こす新型コロナウイルスの世界的な感染が2020年以降、世界的に拡大し、22年を迎えても収束の見通しは立っていない。厚生労働省によれば、人が話す際に出す微細な唾液の飛沫にウイルスが含まれていた場合にも感染する。このため、日本国内では、ほとんどの人たちがマスクを着用し、対面での会話を控える予防策が定着した。対面取材を前提とした報道分野においても例外ではなかった。澤康臣氏（2020年）はコミュニケーションの制約により、取材・報道の現場にも重大な障害となることを指摘する。スポーツ報道の現場においても、多くの取材現場と機会が失われる事態に見舞われた。

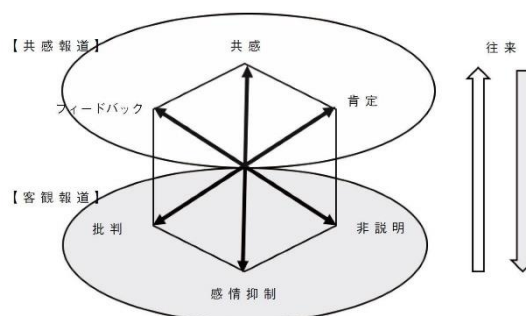
日本国内の新聞社やテレビなどのメディアは対策として、取材対象者や関係者の協力のもと、Zoom（ズーム）やTeamsなどのオンライン機能を活用した取材（以下、オンライン取材）の本格導入に踏み切った。一般企業や学校授業などでは、オンラインをコミュニケーションツールとした会議や授業が以前より導入された事例が数多く報告されているが、日本国内の新聞社による報道現場ではコロナ禍以前には皆無に近い状態であった。

II 目的

筆者は産経新聞運動部に在籍し、2021年の東京五輪・パラリンピックを含め、12年以降の夏冬の五輪5大会を取材したスポーツ報道に携わる現役の新聞記者である。他の多くの記者と同様、コロナ禍以降に初めて本格的なオンライン取材の機会を得た。取材現場で日頃から顔を合わせる同僚や他社の記者からは「取材対象者と顔を突き合せて対面取材がいい」「オンラインのメリットもある」など、オンライン取材の影響に関する感想を数多く耳にした。しかし、実際にオンライン本格導入がスポーツ報道に携わる記者の取材にどのような影響を与えているかを検証した先行研究は見当たらない。本研究は、オンライン取材の本格導入が、従来の対面による取材と比べてどのような影響をもたらしたのかを、21年夏から秋のコロナ禍に開催された東京五輪・パラリンピックの取材現場に着目して検証することを目的とした。

スポーツ報道に携わる日本国内の通信社や全国紙、ブロック紙などの一般紙と通信社（以下、一般紙・通信社）、スポーツ紙の新聞記者への影響が研究範囲とし、専門誌やノンフィクション作家らによるスポーツ・ジャーナリズム、スポーツ報道を網羅したものではない。新聞記事におけるスポーツ報道の定義については、船曳陽子氏（2020年）が先行研究で示した「競技への特別な関心や知識を必ずしも持っていない、一般的な新聞読者に日々読まれるスポーツ記事」と同一とした。

影響する取材領域については、谷俊宏氏、藤本和美氏（2016年）の先行研究を参考に、事実確認を基本方針とした「客観報道」と、取材対象の思いを傾聴し、分かち合う「共感報道」の2つの取材領域を評価軸とした。それぞれの記者が、以下の図で示した2つの取材領域を往来する過程において、オンライン取材の影響がどの部分に生じているかを調査した。



III 方法

1 インタビュー研究

1) 対象

東京五輪・パラリンピックの大会期間中やその前後の期間において、国内外のアスリートや家族、指導者、関係者らへの取材を行った一般紙・通信社、スポーツ紙の15人の記者を対象に、インタビュー調査を行った。内訳は一般紙の記者が男性6人、女性4人、スポーツ紙は男性3人、女性2人とし、年齢はそれぞれ20代～50代である。

2) 方法

オンライン本格導入が、記者の取材活動に影響した要因を、インタビュー調査によって収集し、テキストデータから抽出する質的内容分析を用いた。

3) 分析

古川拓也氏、間野義之氏（2020年）が「中学校運動部活動の活動指針に対する保護者の態度に影響する要因：質的分析を用いた検討」をほぼ全てにおいて参考にし、以下の手順で行った。①ボイスレコーダーの録音を起こしたり、インタビュー現場において重要な回答をメモで打ち込んだりし、特に重要と思われる部分においては逐語録を作成した。②逐語録やメモを繰り返し読み、オンライン取材が記者に与えたと考えられる内容を識別した上で、意味単位でのコードを作成した。③生成されたコードは小カテゴリ、中カテゴリ、大カテゴリへ分類した。

IV 結果

インタビューした15人の記者のうち、オンライン取材が本格導入される前は11人が否定的な態度を示し、3人が肯定的な態度を示した（1人は「どちらでもない」と回答）。本格導入

から1年を経た21年秋の調査実施時期においては、肯定的だった3人は肯定的のままで、否定的だった8人と態度を保留した1人を合わせた9人が肯定的へと態度を変えた。また、否定的な態度を変えなかった3人を含む15人全員がオンライン取材は将来にわたって「取材の選択肢になりうる」旨の回答を行った。対象数が少なく、年代や性別、媒体、担当競技による差異は本研究では断定できる要素までには至らなかった。

これらの態度に対して影響を与えたと考えられる要因を分析した結果、【オンライン取材による構造的な影響】【記者の活動に関する心理的な影響】の2つの大カテゴリを構成した。構造的な影響は、4つの中カテゴリで構成された。

『物理的ベネフィット』は〈時間的制約の解消〉〈移動距離の解消〉〈金銭的ベネフィット〉〈取材機会の拡大〉〈消極的な質の確保〉〈労力の軽減〉〈私的ベネフィット〉の7つの小カテゴリで構成された。『オンライン環境での取材リスク』は〈通信機器(Wi-Fiなど)への懸念〉〈取材形態の変化〉〈取材対象者の態度の変化〉の3つの小カテゴリで構成された。『取材活動への制限リスク』は〈取材時間の制限リスク〉〈他者の存在〉〈オフレコ取材の機会喪失〉の3つの小カテゴリで構成され、『アプローチの限界』は〈情景描写の限界〉〈形成された記事〉の2つの小カテゴリで構成された。

【記者の活動に関する心理的な影響】は、オンライン本格導入により、対面時と違う取材様式になったことが、記者に与えた心理的な影響を抽出した。中カテゴリは『取材対象者との関係性変化への懸念』『取材姿勢や意識への負荷』の2つで構成された。

『取材対象者との関係性変化への懸念』では〈コミュニケーションへの懸念〉〈質疑応答の内容変化への懸念〉〈取材対象者との信頼関係構築への懸念〉〈対象者以外を通して、対象への理解を深められない懸念〉の4つの小カテゴリで構成された。『記者の取材姿勢や意識への負荷』は〈道徳的スタンス〉〈会社、先輩記者による教育〉〈内発的モチベーション〉の3つの小カテゴリで構成された。

V 考察

構造上の影響では、オンラインというツール導入が外形上の取材様式を整えたことによる数多くのベネフィットがもたらしたことが明らかになった。半面、対面時と比較した場合において、質疑応答で対象者の内面に深く入り込み、本音を引き出していく取材プロセスへの限界や、取材現場にいれば可能だったオンライン画面以外の情景描写など取材できるカバー領域の喪失などの課題も浮き彫りとなった。

記者の心理面への影響では、オンライン画面では「踏み込むのは失礼だと思われる」「相手が話してもいいと思う距離感を測れない」「自分のことをわかってもらい、相手のことを理解できるか」などの懸念点が抽出され、オンライン取材に対する葛藤が生じている様子が見えてきた。心理面に好意的な影響はほとんどもたらされなかった。しかし、15人の記者は年数の差はあるものの、入社から一貫して対面取材を行ってきた。オンライン取材本格導入から約1年後のインタビュー調査と

いうことを踏まえると、オンライン取材に慣れていないことが回答に影響したことを否定できない。

VI まとめ

オンライン本格導入は、「速報記事」(ストレートニュース)という事実が確認できれば十分な「客観報道」の取材領域を物理的課題の解消によってカバーできる可能性を示した。このことは、コロナ禍での取材環境が続いたり、将来的に別の要因から対面取材が困難な状況に陥ったりしたときの知見として意義があると考えられる。一方で、アスリートの表情や心情、話すときにわずかなしぐさにまで目配りも求められるような「共感報道」領域への限界を露呈したことが推察された。筆者の経験やインタビュー調査した記者の回答からも「共感報道」領域は、「客観報道」のような事実確認にとどまらない記者の独自色を色濃く反映できる。雑談などの非公式なオフレコ取材が行えないことも含め、この領域での限界露呈が、記者の心理面にネガティブな影響を与えていることが示唆された。

一方で、日本国内の新聞発行部数は右肩下がりでも今後も減少傾向が続くとみられる。こうした状況において、取材現場における経費や人員の削減は避けられず、すでに実施されている。オンライン取材は、本研究でインタビューした記者からも、人員削減、経費削減による出張などの減少の影響を食い止めるため、今後の選択肢として期待する声が多数あった。

記者が取材テーマに応じて、本研究で明らかになったスポーツ報道における「客観報道」「共感報道」という領域を把握した取材が重要になってくると考える。具体的には、事実が確認できれば十分な客観報道の領域にはなるべくオンライン取材の導入を進め、対面取材のほうが取材を深掘りすることが可能とみられる「共感報道」を求められる領域に人員や取材経費を集中するような「選択と集中」を進めることができれば、新聞社の経営状況を改善する一助になるのではないかと考えられる。(了)